

**トピックス 東京都支部総会終わる**

さる5月11日(土)、本部道場(楊名時太極拳記念会館)において平成30年度(第20回)東京都支部総会が開催されました。総会に先だって中野完二名誉支部長による『楊名時師家の思い出』と題する講演があり、総会では事業報告と次年度計画、収支決算と次年度予算がすべて承認され、また、次年度の役員が決まりました。新三役については以下の通りです。

支部長; 土田亮(再任)、常任理事; 南谷充慶(再任)、副支部長; 南: 狭山一夫(新任)、西: 池谷光則(新任)、北: 蔭澤徹(再任)【敬称略】

閑人閑話 「東寺一空海と仏像曼荼羅」展を観る

4月中旬の平日、上野国立博物館で「東寺一空海と仏像曼荼羅」展を観てきました。空海筆の「風信帖」や、空海が唐から持ち帰った密教法具の五鈷杵や五鈷鈴など貴重な展示品が多かったのですが、なかでも圧巻は東寺講堂の立体曼荼羅を一室に再現した展示でした。さすがにご本尊の大日如来は等身大のパネルでしたし、不動明王もありませんでしたが、国宝、重文の諸像が15体も並び、さらに左右には巨大な両界曼荼羅がかけられていて、その迫力は圧倒的でした。まさに、空海が空海流に作り上げた日本独自の立体曼荼羅であることがよく理解できました。

素朴な疑問として思ったのは、ここにはお釈迦様がまったく存在しないことです。そもそも密教のご本尊は大日如来、またはその化身である不動明王です。会場内のパネルにも『当時のインドではヒンドゥー教が強く、仏教の勢力回復のため、その神々を取り入れたのが密教。像に多くの腕や脚があるのも、ヒンドゥー教の神々の形をとりいれたからである。』と解説してありました。【右; 国宝・帝釈天騎象像】

たしかに、「不動明王」は「シヴァ神」、「帝釈天」は「インドラ」と、すべてがヒンドゥー教の神そのものなのは明白なことです。よく仏教の解説書などには“ヒンドゥー教の神々が仏教に帰依して、明王や天部になり、仏教の守護神、いわばガードマンになりました。”と書いてありますが、嘘も方便とは言え、ちょっと?ですね。仏教は密教化(ヒンドゥー教化)することによってその独自性を失い、12世紀、イスラム勢力の侵入もあり、消滅してしまったというのがインドにおける実態です。ともあれ、密教と言う宗教の、またそれを日本的に再構築した空海のすごさをあらためて感じ取ることが出来ました。

**左顧右盼 第22話 『太極拳とは何か(再編集・再掲版)』(第12回)**

～趙匡胤の「探馬勢」から太極拳の「高探馬」にいたる軌跡をたどる～

25 楊名時太極拳の特徴、その独自性と優秀性の確認**25～1 その特徴**

今までご説明してきました通り、楊名時太極拳の基礎は、新中国の人民大衆向けの健康運動として作られた「簡化二十四式太極拳」にあります。その基本的な理念や動きを取り込みながら、さら

に独自に工夫を加えて作られたものが、『楊名時八段錦・太極拳』というもののなのです。

日本健康太極拳協会のホームページには、その特徴が下記のように書かれております。

「心・息・動」の調和（調心・調息・調身）を目指すゆったりとした動きを信条とし、中国古来の医療体術である「八段錦」とあわせて稽古する万人向けの運動として「楊名時八段錦・太極拳」と命名し、半世紀以上にわたり広く親しまれています。「武術ではなく、健康法」という言葉が納得できるほど、動きがゆったりとしている太極拳は、初心者にも取り組みやすく、実際にとっても入門しやすい健康運動といえます。師家・楊名時はことあるごとに、競わないことの大切さを説きました。稽古では、初心者と経験者を分けることなくともに稽古しながら、ゆっくりと演舞する楽しさを味わうことができます。仲間の健康と幸せを願いながら、皆で一緒に心を込めて稽古することで、自分自身の健康と幸せを得られるだけでなく、窮屈でない、大らかな、ゆとりのある気持ちを持つことができます。

とすることで、極めて明快です。しかし、現在、中国では、太極拳の試合も解禁されていますし、競技化はすでに着々と進展して、また国際化しております。オリンピック種目に取り込まれるのも間違いない状況にいたっています。日本でも、公益財団法人『日本武術太極拳連盟』《名誉会長；二階俊博衆議院議員・自民党幹事長》では、目的として『生涯スポーツ』と『競技スポーツ』の両方を掲げて、それに対応する組織となっております。また、ジュニア部門、学生部門、成人部門という組織も完成していますし、我々の日本健康太極拳協会とは異なる目的と組織規模、組織実態、にあるわけです。（以下次号に続く）

一品・一葉・一会 第13回 マニ車（1999年、ネパール・ポカラで購入）

観光ツアーでネパールを旅した時に、ポカラの町はずれで、チベット難民たちが売りに来たお土産品をあれこれ買



いましたが、そのひとつがこのマニ車です。分銅がついていてくるくると良く回ります。回した回数だけのお経を読んだと同じ功德があるということです。

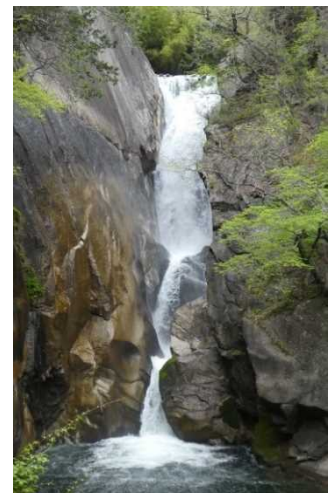


首都カトマンズ近郊のパシュパテナートのホスピスと隣り合った火葬場、ポカラから仰ぎ見る聖山マチャブチャレ（6993m）の双耳峰【左】、遊覧飛行で真近に仰いだエベレストの迫力など、

忘れがたい思い出の詰まった旅でした。

旅をうたい拳を詠む 甲府と小淵沢の旅のうた

4月29日（月） 10連休を利用して二人で4泊5日の旅をしました。行き先は甲府と小淵沢の温泉です。この日は昇仙峡に上り、仙娥滝【右】を観て、瀧上の「円実屋」で名物のほうとうを食べ、バスで湯村温泉へ下り、B&B形式の湯村温泉ホテルに宿泊。今日から三連泊。



花崗岩を断ち割るように落ちかかる名前は優しく仙娥瀧とふ
湯村なる志麻の元湯の源泉の肌に優しきかけ流しの湯

4月30日(火) タクシーで県立美術館へ。ミレーのコレクションを観る。入館料無料がうれしい。「落穂ひろい」はじめ数々の名画を鑑賞。丁寧な解説が付せられていて理解が深まる。館内のレストランで「種を撒く人」が描かれたドリアを食べ、駅へ出てお土産物屋を見て回りホテルへ戻る。

「羊飼いや「落穂ひろい」に秘められた寓意知り得たミレー館の展示
絵を見れば旅の思い出よみがえるバルビゾン村ミレーのアトリエ

5月1日(水) 朝散歩に出て、湯谷神社、良純親王逗留宿跡、弘法大師開山の塩沢寺などを歩く。10時過ぎ武田神社へ行く。令和初日の御朱印帳を求める人波が延々と続いているのに驚く。門前に新設された信玄ミュージアム(一部有料)に入る。駅北口にできた「甲州夢小路」を散策、昼食。夜はホテル近くの「ごっちょ」で夕食。馬刺し、鳥モツ煮込み、など地元の名物で飲む。

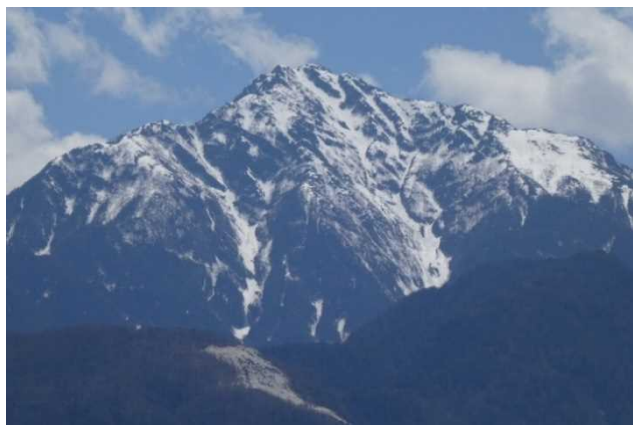
塩沢寺山門→

御朱印を求めて長蛇の人波は令和初日の武田神社も
過剰とも思えるほどに入れ込んで街じゅうどこでも“武田信玄”
鳥モツ煮馬刺しほうとう信玄餅ワインは勝沼酒は七賢



5月2日(木) 早朝に窓を開けると、富士山、鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳など、ずらりと見えて大満足。甲府から特急で小淵沢へ。車窓からの左右の眺めが素晴らしい。小海線でJR最高標高1346mの野辺山駅に10:30着。八ヶ岳の眺望を楽しんでいるうちに山を隠すような雲がこちらに落ちかかって、小雨がぱらつき急に温度が下がってきたので、予定を早めて12:00発で、小淵沢着12:31。途中また天気が回復して八ヶ岳の眺めを車窓から楽しむ。駅構内のそば屋で野趣あふれる豚ばら肉そばを食べて、早めにホテルの車を呼んで、「スパティオ小淵沢」にチェックイン。このホテルは道の駅小淵沢の構内にあるホテルで、“断層温泉”がウリ。道の駅は大繁盛だが、それに引き替えJR小淵沢駅前の商店街は瀕死の状況！日本もすっかり車社会に替わったことを実感する。

黎明に雨の上がりし甲州路令和の富士は凜然と立つ
山桜まだ咲き残る高原をことこと走る二両編成
残雪の赤岳仰げば思い出す六十年余の昔の山行
峰越えて吹きおろし来る雲ににわかに昏き野辺山高原



道の駅から仰ぐ甲斐駒ヶ岳



甲斐大泉駅から赤岳遠望

5月3日(金) ホテルの5階の朝食会場からは、真正面に甲斐駒ヶ岳と鳳凰三山が聳え立っていて、その間から北岳も顔をのぞかせているという素晴らしい景観！

チェックアウト後再び小海線に乗って次の甲斐小泉で下車。この間のぐるっと大回りして登ってゆく車窓の眺めの転換がたいへん劇的。今日はなんと富士山もぼっかりと浮かんでいる。

駅前の「平山郁夫シルクロード美術館」が今回の旅の最大の目玉！同氏没後 10 年記念の「シルクロードシリーズ」や、数々の貴重な収集品などをゆっくりと鑑賞。途中ですぐ隣のレストラン、「亜細花 (アシカ)」で昼食を取り、再入館して列車の時間まで鑑賞。駅の前

のさくらの老樹はまだ花を付けていて、鶯がしきりに鳴いている。
小淵沢に戻り、特急あずさ 52 号に乗り、韭崎、甲府へと下ってゆく左右の壮大な、そして思い出深い景観を楽しみながら、缶ビールで今回の旅の最期を締めくくる。 【右；仏像座像 3～4 世紀 ガンダーラ出土】

シルクロードの名画に見入れば思い出す昔歩いた旅の苦楽を
展示室でガンダーラ仏と真向かえばさながら伽藍に祈る心地す
高々と富士は霞の中に浮き桜老樹にうぐいすの鳴く
甲斐駒や茅ガ岳などみぎひだり「あずさ」は甲府へ走り下りゆく



旧古河庭園のバラを詠う

さる 5 月 16 日、地元の老人会のメンバー 32 名でバラが満開の旧古河庭園、御殿前遺跡、飛鳥山公園などを歩いてきました。バラがあまりにも素晴らしかったので、写真と短歌でご紹介します。

とりどりに色香を競い咲き盛るバラを愛でつつ巡る庭園
赤白黄紅に紫青ピンクそれぞれ競う大輪のバラ

